



翻刻 大意

- ・これは、企画展「TSUNAGU・甦るモノたち」(会期：令和4年7月16日(土)～9月4日(日))出品称の一部について、翻刻および大意を掲載したものです。
- ・No.は展示番号と一致します。
- ・旧字は新字にあらためました。
- ・読者の便宜を図るため、適宜句読点を付しました。
- ・判読不能な文字は■で示し、改行は「」で記しました。

No.7 大正新田開墾の沿革 (当館蔵)

【翻刻】

大正新田開墾の沿革

刈谷町大字熊青年会は明治三十八年同志青年相謀り研究会なるものを組織したるに起因せり、尔来年を逐ひて会員の増加を来すと共に熊有志青年会」と改称し三浦又衛自ら起て会長の任に膺り会務に精励せり。その後大字有力者等互に応援して、更に会を拡張して熊青年会とせんことを区長に建議し区長を会長に「仰き、大字より補助金拾貳円五拾銭を受け以て会の發展を図りつゝありし、茲に明治四十四年、時の会長を始め会員等大に道路の改修土木工事の請負及び青年試作」地等をなし、其の得たる賃金并に利益金を会費に充て会の蓄積金を得ると共に、一方各地の事業祝祭により得たる知見に基き、本会をして独立自営の基礎を得「せしめは将来益々隆盛發達の機運に到達することあるを覚悟し、尔来之が方法に苦心焦慮せり時、恰も大字共有地字三代淵の荒蕪地を大字に於て開墾」し良田と為さんとせしも、開墾費の多大に驚き収支償はざる事業はその儘となし荒蕪地より生ずる下草代を得るに如かずとの評議一変したるを」以て、高野源次郎并青年会員等と自ら進て従来の大字補助金に換るに、該荒蕪地を借受け青年会記念事業として良田となさん事は、一は国家の福利を」増進し、一ハ本会の基本財産を得て本会独立自営の目的を達せんことを思ひ、事の由を大字に建議をしに大字は喜んで之を容れたり。是に於て会員等は三十四名一致協力して、明治四十五年三月廿八日をトし工を起し、尔来務めて農家の休暇日を利用して工事をなし、工賃として曩に貯蓄したる金額其」他従来の事業により得たる賃金并に利益金合計金五拾六円三拾貳銭を以て、僅かなる弁当料を会員に支給し、大正二年六月十六日愈々工事竣工を告げ、初年の「植付をなす。この工事年数一年三ヶ月工事に要せし。人夫貳百五拾三人六分にて開墾面積壹反九畝拾歩を得たるも、不幸にして八月三日海嘯の為周囲の堤防を破」壊せられ、收穫皆無の悲運に遭遇せしも、会員等は尚不撓不屈一層事業に奮励努力して、堤防の修繕笠置工事の為に更に三十五人五分の人夫を」費し、大正三年三月十五日に至り全く工事の竣工を告げ、大正新田と命名し、耕耘植付除草灌溉等の手入をなし、大正三年度に收穫米五石」八斗価格六拾七円九拾壹銭、其他堤防の下草藁稈等雑収入拾貳円貳拾銭、合計金七拾八円拾壹銭を得たり。この間会員等は断へず毎月夜間四回の会合日を定め、娯楽としてハ将棋囲碁俳句相撲清書会体力増進■等の施設をなし、精神修養としては一日一善及神社境内の掃除」献燈并に名士の講話会等協同一致会の為めに書瘁し敢て懈■あらず。大正四年四月八日竣工記念として起工業の会員一同打揃ひ伊勢」大廟へ参拝し、四月十九日を期し本会発会式并に大正新田竣工記念式を挙行し、高野源次郎氏に対し記念品を贈呈し年来指導の労を謝せし■(後略)

【大意】

大正新田開墾の沿革

刈谷町大字熊青年会は、明治38年（1905）に研究会を組織して以来、会員が増えるとともに熊有志青年会と改称して、三浦又衛が会長になり、会の仕事を一所懸命に務めた。土木工事などを請け負って得た賃金などを会費にあてていたが、この地域の荒地を開墾する費用の高額さに驚いた。このままでは荒地地にかかる税金を賄えない、と議論が変わってしまった。しかし、高野源次郎と青年会の会員たちが、自ら進んで荒地を借り受けて、青年会の記念事業として良い田んぼとすることは、一つは国家の幸福と利益を増やし、一つは会の基本財産を得て会が独立自営できるようにすることだと思い、その旨を地域に意見した。すると、喜んで受け入れられた。こういうわけで、会員たちは農家の休暇日を利用して仕事を進めた。工賃として、先に貯めていたお金や従来の事業で得られる賃金などから、わずかな弁当代を会員に支給した。大正2年（1913）6月16日にいよいよ工事が完了し、初めて植え付けを行った。しかし、不幸にも海嘯（川を逆流する波または津波）によって周囲の堤防が破壊され、収穫が全くないという悲運に遭遇した。けれども会員たちは、不撓不屈で一層事業に励み、堤防の修繕工事を完了し、大正新田と名付けた。田を耕したり、植え付けを行った。除草作業や灌漑などの手入れをして、大正3年度に米を5石8斗、価格にして67円91銭、そのほか堤防の下草や藁などの雑収入12円20銭、合計78円11銭を得た。大正4年（1915）4月8日に竣工記念として、会員一同そろって伊勢神宮へ参拝し、4月19日に本会（刈谷町熊青年会）の発会式と大正新田の竣工記念式を行い、高野源次郎氏にたいして、記念品を贈呈し、長年の労に感謝した。（後略）

逢妻川



歴史博物館

【大正新田の場所の推定】

本資料に記載の「大正新田」の場所は、本紙下部にある図の河川および道路の形状から、当館付近の逢妻川・境川沿いであると考えられます。

この写真は、刈谷境橋から南側を撮影したものです。

〔撮影日：令和4年6月29日〕

No. 11 静観堂屏風（金勝寺蔵）

【翻刻】

予寓浪越之三年、府下書肆静観生齋其所蔵勾田台嶺山水八張來、請曰…欲以此造六曲「屏風。為一隻則贏二、為一双則欠四。与嬴二之無用、何如欠四之待先生而全也。請先生文以」補其闕則幸甚。予咲曰…生亦貪多也。然以予知生日久、不敢峻拒、遂為論叙其次第。

（中略）

維時文久紀元辛酉孟冬上浣、奎堂散人松本衡 識于浪越石街寓居。

【大意】

わたくしが浪越（名古屋）に寓居して三年、城下の書店静観堂の主人が、所蔵する勾田台嶺の描いた山水画八枚を持参して、訪ねてきた。彼が求めるに「この山水画を用いて六曲の屏風を作りたいのですが、一隻（半双）にすると二枚が余り、一双にすると四枚分が足りない。二枚を余して無駄にするより、この際空いている四枚を先生にお願いし、完全な屏風にする方がずっとよい、と思った次第です。ひとつ先生の文章を頂戴し、空いた四枚を埋めていただければ、幸いこれに過ぎたるはありません。」

わたくしは笑って言った。「主人もまた、ずいぶん欲深いひとだ。」しかし平生より久しく主人を見知っていたことから、むげには拒絶せず、かくして彼のために順序立てて論贊を叙述することにした。

（中略）

これは文久元年（1861）辛酉歳の孟冬（10月）上旬、奎堂散人松本衡 浪越の石町の寓居に識す。